

「異文化適応」論の中の日本人特殊論について

木 村 有 伸

はじめに

日本の文化や日本人の行動・思考様式の独自性を強調する言説、いわゆる日本人論（日本文化論）については、それを学問的な主張と見なすことに疑問の声が上がって久しい。しかし「異文化」を冠する議論では、なおこうした日本人論的主張を目にすることができる。本稿は、そうした言説を分析する試みである。具体的には、日本人の異文化適応についての議論を取り上げ、まずはそこで論じられる「日本的」特性の内容・特徴を明らかにする。つづいてその特徴の一つとしての『『日本的』特性の独自性の強調』（本稿では「日本人特殊論」という呼び方も併用する）に注目し、そうした主張の立論上の問題点を指摘する。最後に、そうした独自性強調の言説の、後発の議論への影響を明らかにする。

異文化との接触を前提として、そこで生じるさまざまな事象について分析・考察する試みは、大きく分けると、異文化コミュニケーション研究・異文化間心理学・異文化教育の分野で行われてきた。それらはいずれも学際的な性格を持ち、互いの研究成果を生かし合う関係ではあるものの、異文化適応というテーマについては、なかでも異文化間心理学の分野において進められてきたといえる。この分野には心理学をはじめとして、文化人類学・精神医学などの研究成果が活用されている。

異文化への適応については、20世紀初頭にはすでに米国において精神医学者による移民についての事例の報告・調査などが行なわれていたが、研究のテーマとして多くの関心を集めるようになるのは、第二次大戦後以降のことである（高橋，1983；箕浦，1987）。その背景には、米国へ留学する外国人留学生の増加や、外国企業からの駐在員とその家族の増加、あるいは逆に米国から海外へ赴く人々の増加がある。とくに1960年前後より心理学者が文化接触過程に関心をもつようになり、適応に関する理論的な研究も進められるようになった。「カルチャー・ショック（culture shock）」の概念が文化人類学者のオバークによって提唱されたのも、ちょ

うどこの頃である (Oberg, 1960)。

日本においては、1960年代半ばに、米国で学ぶ日本人留学生の生活適応・精神衛生に関する報告が精神医学分野から提出されたが(稲永他, 1965; 島崎・高橋, 1967a; 1967b), 日本人の異文化適応についてさかんに論じられるようになるのは、カルチャー・ショックの概念が定着する1980年代以降である。当然その背景には、海外渡航・滞在を経験する日本人の増加がある。それと並んでこの時期は、日本と諸外国との間の「文化摩擦」の問題がさかんに論じられていた時期でもある¹⁾。日本文化の特性が、他の文化との葛藤、緊張、対立を生んでいるということが、当時の政府を含め、多くの人々の共通認識となっていた。そのような中、カルチャー・ショックは個人レベルにおける文化摩擦と見なされた(星野, 1982)。このことが日本人の異文化適応に関する議論において、「日本的」特性が注目され、その独自性が強調される背景になっていることは間違いない。

本稿は、異文化適応に関する議論の中で、日本人を特殊と見なす言説が受け継がれている点を明らかにすることを目的としているが、そこへ辿り着くまでに、そうした言説の実証性の乏しさを明らかにするのに多くのページを割くことになった。これは、後発の議論があまりに無批判にそうした言説を受け入れていることから、改めてその実証性を問う必要性に迫られたためである。本稿では、後発の議論で参照・引用される文献が、少なくともその文献の論じ方では「日本的」特性の独自性を証明できないという点を改めて明らかにしておきたい。そのうえで、そうした言説が後発の議論へと受け継がれている点を問題にすることにする。

1. 不適応の要因とされる「日本的」特性の内容と議論の特徴

「日本的」特性の独自性を強調する言説(「日本人特殊論」)は、日本人のカルチャー・ショックや不適応の要因を日本人の行動特性に求めようとする議論において表れる。この節では、そうした議論を取り上げて、記述内容とその特徴を見ていくことにする。

日本で異文化適応に関する議論がさかんになるのは、先述のとおり1980年代であるが、社会人類学者の中根千枝はかなり早い時点からこの問題に着目していた人物である。彼女は、著書『タテ社会の人間関係』(1967年)においてすでに、日本人の行動特性がいかに「国際性」に欠けるかについて論じている。そして、つづく著書『適応の条件』(1972年)において、カルチャー・ショックを取り上げ、日本人と現地社会の住民との文化の違いによる衝突について論じている²⁾。『タテ社会の人間関係』が今日では代表的な日本人論の一つとして位置づけられているように(青木, 1990; 南, 1994), 両著作とも、列挙される日本人の行動特性が日本人に特有なものとして論じられている点に特徴がある。

精神医学者稲村博の『日本人の海外不適応』(1980年。本稿では1980a)にも同様の傾向が

指摘される。稲村は、1977年度から3年間にわたる文部省科学研究費の特定研究「東アジアおよび東南アジア地域における文化摩擦の研究」に、精神医学の分野から参加した研究者の一人である。この著書はその成果の一部である。そこでは在外日本人の不適応の症例の紹介と並んで、不適応現象の分類、適応の法則性の分析、そして日本人の行動特性についての考察が行なわれている。また、この著書と前後する形で、同様の知見が、心理学・精神医学分野の雑誌や文献においても披露されている（稲村、1979; 1980b; 1980c; 1980d）³⁾。

稲村の著作と同様に、在外日本人の症例を紹介しながら、適応一般に関する考察や日本人の特性に関する考察を行なっているのが、臨床心理学者近藤裕の『カルチャー・ショックの心理』（1981年）である。この著作では、中根や稲村の著作がすでに参考文献として挙げられている⁴⁾。それと並んで、その他の日本人論も参照・引用されている。

日本で異文化適応に関する議論がさかんになるのは1980年代以降なので、これらの著作はその先駆的な存在として位置づけられる。それゆえに、後発の議論においても参照・引用されていることが多い。日本人の異文化適応の問題を論じるうえで、影響力を有してきた議論であるということができる。以下に、それらが論じる「日本的」特性の内容と特徴を挙げてみたい。

1-1. 「日本的」特性の内容

結論を先にいえば、彼らが「日本的」な特性として述べているものは、「自文化中心主義」と「集団主義」の二点にまとめられる。まずはこれを論者自身の表現に近い形で拾ってみよう。

① 中根：「日本的システム」の強制（中根、1972）

中根はシステムという概念を提示し、次のように説明する。個人の社会生活は無数に張り巡らされた複雑なシステムの中で行なわれている。それぞれのシステムは機能の強弱、可変性の度合において必ずしも同じではない。この統合のされ方は社会によって違っていて、この違いが大きいときに、私たちは「文化が違う」という認識をもつのである。そして、日本人の場合とくにカルチャー・ショックがひどいのは、日本人が国内において自分たち以外のシステムに触れる機会が少なく、海外においても自分たちのシステムを押し通そうとするためである。

② 中根：厚い「ウチ」の壁（同上）

日本人の不適応の要因としても一つ挙げられているのが、日本人の人間関係に存在する「ウチ」と「ソト」の概念である。日本人はウチ（内側）にいる人間との関係は大事にするが、ソト（外側）の人間とはおそろしく疎遠である。これは日本人の、異質を認めない連続の思想に起因する。したがって異質なものを異質と認めて、そのうえで付き合っていくということができず、国際的な人付き合いの弊害となっている。

③ 稲村：日本人が固まること（稲村，1979; 1980a; 1980d）

稲村が挙げるのは、日本人の固まる傾向である。これは先進国においても、発展途上国においてもみられるという。そして「その極端さは各地で注目され、多くの場合に奇異で不可解なものとして受けとられている」（稲村，1980a: 138）。日本人の固まる傾向は、現地住民との間に誤解や軋轢を生んでいる。それと同時に、日本人同士の間でも問題を引き起こしている。

④ 稲村：自己完結性と対人疎通性の乏しさ（同，1979; 1980a）

もう一つが、日本人の自己完結性・対人疎通性の欠如である。自己完結性とは、心理的な自立度の高さを示している。対人疎通性とは、見知らぬ者にも心が開かれていて、すぐに打ち解けられる能力の高さを示している。稲村によれば、日本人はこの二つの能力が共に乏しいという。これが日本人の「国際音痴」を生み、不適応を起こす要因となっていると説明される。

⑤ 近藤：自文化中心主義（近藤；1981）

近藤はまず前提として、日本人は異文化に対する受容性が低いと論じる。日本人は外国にあって、自然環境や物質環境にはさほど問題なく適応できる一方、人的環境や精神環境には適応に問題を生ずることが多い。このような精神面での受容性の低さの原因として、近藤は日本人に根強く存在する自文化中心主義を挙げる。そして、島国・単一民族であること、歴史的に異文化との交流が少ないことが、日本人の自文化中心主義を強固なものにしていると論じる。

⑥ 近藤：集団への依存性（同上）

日本人の行動特性は、つねに他者に依拠する点にある。したがって、日本人は集団での行動を好み、それに依存する傾向がある。このような人間関係に慣れている日本人は、個人としての生活が求められる異文化社会においては、たちまち弱さを露呈してしまう。したがって日本人は日本人同士で集団行動をとることを好み、これがまた現地社会との距離をますます大きいものにしている。

以上が、「日本的」特性の内容である。

1-2. 議論の特徴

次に、これらの議論の特徴について述べる。

① 独自性の強調

彼らの議論の最大の特徴は、彼らがそれぞれ挙げた特性を単に「日本的」とするだけではなく、他国に類を見ない、きわめて独自性の強いものであるととらえていることである。読者にそのことを印象づけるために、彼らはどのような論じ方をしているか、ここではこの点に注目

したい。

その第一の方法は、日本を例外的な存在として強調することである。稲村の記述からその例を挙げてみよう。

（引用者注：現地従業員が概して「愛社精神」に欠け、条件のいい会社へあっさり転社することについて）「もっともこれは、日本人以外はみな同じ習慣のほか、価値観や人生観の相違から出たもので、一概に非難することはできない。むしろ日本のほうが例外と知るべきであろう。」（同、1980a: 65. 下線部は引用者によるもの。以下同じ）

同様の表現を、稲村は他の箇所においても用いている⁵⁾。

中根の場合は、「日本対他の国々」という対立図式を鮮明にして、日本の独自性を印象づけている。中根については、先行の論考では、彼女のインド社会における調査経験が日本社会を論じる動機となっていると説明されているが（青木、1990）、中根のインドの位置づけ方は、単なる日本とインドの比較とは言いがたいものがある。彼女の場合は、明らかにインドは単独で日本と比較される対象ではない。それは、次の例によく表れている。

「このような日本的人間関係に比べて、中国人・イギリス人・インド人などの場合はずいぶん違う。」（中根、1967: 58）

「この種の人間関係（引用者注：友人関係）は、インド人ばかりでなく、欧米人やその他多くの人々に通ずるもので、国際的な仕事には、こうした関係が重要なベースになっている。残念ながら、こうした関係は日本人の場合にはあまり機能しない。（中略）その意味で日本のシステムは国際性に欠けるものといえよう。」（同、1972: 42）

同様の表現は他の箇所にも見られる⁶⁾。このように、インドと述べるその後ろには中国や欧米が存在し、日本と対立する形で位置づけられている。日本側に割り振られる特性、また、それに対して外国側に割り振られる特性から察するに、中根の場合、インドや中国は建前であって、その本音は欧米との比較にあるのではないと思われる。いずれにせよ、日本とその他の国々という対立図式が描かれ、その差異が強調される。そして、「日本的」特性は、二番目の例にあるように「国際性に欠ける」と論じられるのである。

独自性を印象づける第二の方法は、地理的条件・社会的条件などを持ち出して、日本の「単一性」を強調することである。その代表的な例が、「島国」と「単一民族」を引き合いに出すパターンである。それによって、日本が古来より孤立し、隔絶した国であったかのように論じ

るのである。これは三者ともに見られる傾向である。それぞれ一例ずつ引用しよう。

「日本人の場合、特にカルチュア・ショックがひどいのは、日本社会というものが同一民族で構成されており、島国で、大陸にある国のように異なる文化をもつ社会と隣接していないため、自分たち以外のシステムが存在するということを、国内にいて実際に知る機会が皆無であるためである。」(中根, 1972: 14)

「ことにわが国のように、海に隔てられた島国で、単一民族が長い世紀にわたって独特の文化を育てている場合には、海外で生活する時の文化摩擦はただならぬものがある。不適応現象の頻発も、けだし当然といわねばならない。」(稲村, 1980c: 983)

「このような日本人の根強い自文化中心主義はどこから生れてきたのだろうか。いろいろな要因が考えられるが、基本的には、日本が島国であるという自然環境と、単一民族であるという社会環境が、日本人の自文化中心主義を育てる土壌となっているということ是否定できないだろう。」(近藤, 1981: 122)

以上のように、「単一性」が強調されるとともに、日本人の不適応の根幹を成すものとして論じられている。これに対して、外国については多人種・多民族の行き交う複合民族・複合文化のイメージで語られている。「単一性」ですら日本独自の特性であるかのように論じられている。

また、この際の、論者による日本人の均質化には著しいものがある。日本人全員をあたかも同質であるかのように論じているのだが、その記述はきわめて観念的で、偏見の入り混じったものである。たとえば近藤は、日本人について「島国で長年にわたって異文化との接触なしに、どこを見ても同じような顔をした人がいて、同じ言葉を語り、同じようなことをやっているといった環境にどっぷりつかった状態・・・」(近藤, 1981: 130)と述べている。この「同じような顔をしている」、「同じようなことをしている」という見方は、ステレオタイプの典型的なパターンといえよう。こうした認知上のバイアスは、本来は外集団 (out-group) に対して生じるものであるが (Ostrom & Sedikides, 1992)⁷⁾、ここではそれが内集団 (in-group) に対して働いている。ここでは明らかに、外部から見た日本イメージが近藤の中で内面化されているといえよう。そうしたバイアスで論じる「日本的」特性にどれほどの妥当性があるかは、大いに疑問である。

② 日本人の行動・振る舞いに対する嫌悪感

不適応の要因として挙げられているだけに、「日本的」特性の内容には否定的なニュアンスが漂っている。論者たちには、これらの特性は日本人が改めるべきものとして映っているのである。したがって、彼らは他の日本人が取る行動に対して非常に敏感に反応する。他の日本人が（とくに海外で）「典型的な日本人」の行動・振る舞いをしようものなら、論者たちは非難の矛先をその日本人に対して向けることになる。この例を中根から引こう。

〔引用者注：ロンドン大学で）社会人類学の同僚とお茶を飲みながら談笑していたとき、ちょうどアメリカの大学の出張講義から帰ったばかりの教授が「そういえば、チエ、君を知っているという××教授（日本人）に会ったよ。」と私にいておいて、一同を見まわし、「それがとてもおもしろかったんだ。僕は彼が民族学者だというので、ミス・ナカネとお知り合いですか、ときいたんだ。彼氏曰く『よく知っています。』、ところがその後でいうことがふるってるんだ。そこでちょっと間をおいて、彼はいかにもいたずらそうにオチを次のようにつけたのである。『しかし、彼女は私の後輩なんです！』と。その時、話し手も聞き手も一度にどっと笑ったのである。』（中根、1967: 86. 傍点原文）

日本において、ある知り合いが先輩・後輩の間柄にあるとき、そのことに触れるのは何ら不自然なことではない。中根だってそのことは十分に知っているはずである。しかし、彼女はそうした典型的な日本的行動・思考様式を海外で表明することには否定的なのである。外国人とともにその日本人の発言を嘲笑するという行為にそれは表れている。そうかと思うと、もう一方では、外国崇拝を露骨に見せる日本人を、「アチラにイカレタ」タイプとして批判する（中根、1972: 62）。どちらにせよ、日本人の行動・振る舞いに対しては、厳しい視線が注がれるのである。

この点は、他の社会にも日本と同じような特性が見られた場合の、論者の「解釈」の違いにもよく表れている。たとえば、稲村は日本人の特性として「固まる傾向」を挙げているが、さらに読み進めれば、この傾向は中国人・ユダヤ人・インド人にも見られると書かれてある。しかし、稲村によれば、彼らの固まり方は日本人とは大きく異なるという。たとえば中国人との違いについては、次のように論じている。

〔引用者注：中国人の）固まり方は邦人などよりはるかに徹底したものと見える。

ところが、彼らはどの土地でも強固で安定した座を占めており、その社会で認められ、あまり奇異な目でも反感でもみられていない。（中略）

なるほど邦人も、日系移民は南北アメリカなど諸国に住み、その国の人になり切って貢

献をしている。(中略)しかしながら、彼らの姿勢はどこか中国人とは違う。もっと必死であり、せっぱつまっていて、ゆとりや自然さが無い。ひたすらにがむしゃらなのである。(中略)確かに日本人は生真面目でおとなしいのだが、それ以上にあまりにも姿勢を正し、けなげすぎるのである。おおらかさやゆとりなどはない。

邦人の固まるのは、そうした内容の固まり方であり、そのために窒息しそうなほど緊張した雰囲気しばしば漂っている。(中略)こうした緊張が、当然ながら他面では精神障害者を生み出すことにもなる。」(稲村, 1979: 322-323)

この記述を見れば明らかなように、これは中国人と日本人とが現実に異なるというよりは、稲村の解釈が異なるのである。「おおらかさやゆとり」の有無についての根拠はまったく示されていない。また、ユダヤ人との比較でも、日本人については、「邦人の固まり方などまさにかわいいおままごとのようなものである。あまりに単純で、そして未熟な露骨さに満ちている」(同上: 323)と論じられる。日本人に対しては、否定的な評価が下されているのである。

近藤は、日本人の自文化中心主義を示すものとして、日本で道路の標示やレストランのメニューが英語で書かれてない点を挙げる。同時に、外国で逆のことが存在する点、つまり外国で日本語の標示やメニューが期待できない点にも一応は触れている。しかし、それについては看過したままで、日本での事例についてのみ、次のように述べている。

「だが、国際用語となっている英語が、だいたい世界の主要国の公共施設に用いられているように、日本においても英語(ローマ字だけでなく)の標示をするという親切さがあるべきだと筆者は考える。いずれにせよ、このような例は外国人の立場を無視した日本人の姿勢を示すものと考えられるのである。」(近藤, 1981: 127-128)

このように、日本の場合には日本人の自文化中心主義に起因するものとして解釈されるのである。だがその直後に、今度は日本語が話せる外国人に対して日本人が英語で話しかけるという事例が紹介される。そして、これについては「日本人の異質なものに対する受容性の低さ」(同上: 128)と解釈される。外国人の言語に合わせる・合わせない、いずれにしても日本人が非難される点では共通している。解釈に際して、日本人の行動・振る舞いに対する論者の嫌悪感が先に立っていることがよくうかがえる。

2. 日本人特殊論の方法論的問題点

前節では、不適応の要因とされる「日本的」特性が、あたかも日本独自のものであるかのよ
228 (422)

うに論じられている点を明らかにしたが、本節ではこの立論上の問題点を指摘したい。

このような問題を分析するにあたって参考になるのが、日本人論についての批判的研究である。日本人論の批判的研究は、議論の立論のあり方を問題にするものと、議論のイデオロギー的性格を問題にするもの、個別の記述内容の正しさを検討するものとに区別されるが、本節で参考にするのは、一番目の批判的研究である。この研究の代表的な例として、社会学者杉本良夫とロス・マオアの一連の研究が挙げられる（杉本・マオア，1979a; 1979b; 1979c; 1982）。

① 比較なき特徴づけ

これらの議論の問題点は、第一に、「日本的」特性の独自性を強調しておきながら、その根拠となる他国との比較がほとんど行なわれていない点にある。日本人論における同様の問題点を、杉本とマオアは「比較なき特徴づけ」と呼んでいる（杉本・マオア，1982）。

「日本的」特性について論じている箇所には、「日本人は○○である」あるいは「日本人の場合、○○である」といった命題が繰り返し登場する。それを証明するために、具体的な例が示されたり、その根拠となる別の命題が示されたりする。しかし、繰り返されるのは日本に関する命題ばかりで、他国がどうなっているのかという点にはほとんど触れられない。そこでは、「他国は日本とは異なる」ということが前提となっているのである。次に示す例は、それぞれ「日本人」について述べられているものである。まずは引用しよう。

「たとえば、現地でコックをやとっても、そのコックに現地料理をいろいろ作らせて、その中から好きなものを発見していくというよりは、日本の家庭料理を作ることをおぼえさせるという方向が圧倒的に多くの日本人滞在者によってとられている。」（中根，1972: 17）

「海外で仕事をする多くの日本人は、それと知らずに、一方的に自分たちのシステムを相手におしつけてしまっている場合が少なくない。」（同上: 32）

このように述べる一方で、同様のシチュエーションにおいて、他の国の人々がどのような行動をとるのかという点については、まったく触れていない。もしこれらを日本人に特有の行動特性であると論じるならば、外国人の場合には、日本人のケースとは逆の、「現地料理から好きなものを発見していく」、「自分たちのシステムを相手に押し付けない」という行動が明らかにされなければならないのだが、そうした比較は行なわれていないのである。

また、次のような例にも「比較なき特徴づけ」の問題を見出すことができる。

「（引用者注：日本人の）もう一つの特徴は、独特のスケープゴート（いけにえ・非難の対象）

づくりである。スケープゴートは何も日本人だけがつくるわけではなく、他の国の人々もそれぞれにつくっている。しかし、日本人のそれは非常に独特な点の多いのが注目される。」(稲村, 1980a: 155)。

この場合も、「独特」と述べるからには、他の国の人々と何が異なるかを明らかにしなければならぬはずだが、この文章で触れられているのは日本人のケースばかりであって、外国人についてはまったく触れられていない。それで、なぜ「独特」といえるのか。その根拠は本文中からは見出すことができないのである。

② 命題間の矛盾

第二の問題点は、列挙される命題に矛盾が生じていることである。杉本とマオアは、中根の『タテ社会の人間関係』を取り上げた際に、この問題を「命題間の矛盾」と呼んで指摘している(杉本・マオア, 1979b)。

この点については興味深いことに、中根においても稲村においても、「外国に対する知識」という命題において、共通する矛盾を引き起こしている。日本人は国外に自分たち以外のシステムがあるということをよく理解していない、よって自分のやり方を相手にも押しつけようとする、というのが先述のとおり中根の議論の骨子であった。稲村においても、日本人の異質文化に触れる経験の乏しさが不適応につながっているという主張がされている。しかし、これらとは別に、「日本的」特性がいかにユニークなものであるかを論じる文脈においては、反対に、外国人の日本に対する知識の乏しさが強調されている。すなわち、日本人が期待しているほど日本は外国人に知られているわけではないので、日本人はきちんとそれを認識して行動せよ、と彼らは主張するのである。その文脈では彼らは次のように述べている。

「これらの国々(引用者注: 欧米・中国・インド)の全体像ならびに特色が相当よくわかっているのに対して、日本の場合、知られているのは、私たち日本人からみると、極端な側面の断片的な部分であるために、イメージとしては何となく気味がわるいものとなっております、まったく知られていないより、マイナスの効果さえもっている。」(中根, 1972: 122)

「欧米の白人至上主義的な考えは今日なお頑固なほど徹底した面があって、差別するかしないかは別として、意識にも視界にも日本など入っていないかにみえる。日本がどこにあるかも知らなければ、どんな特徴があるかも全く知らない人が多い。」(稲村, 1980a: 44)

外国人について述べたこれらの箇所と、日本人について述べた「日本人のソトに対する興味,

関心には驚くほどの限界がある」（中根，1972: 131）・「これら（引用者注：海外での失敗）はみな無知によるもので、相互の差の正しい認識が欠落していることから生ずる」（稲村，1980a: 208）という箇所には、どれほどの違いがあるだろうか。外国に対する知識が不足しているということでは、両者共通しているのではないか。ところが、一方では何ら問題にされずに、もう一方では、それが日本人の自文化中心主義を示す根拠として用いられているのである。これは先にも述べたように、論者の解釈の違いが反映されているのであって、命題としては明らかに矛盾をきたしているといえよう。

また、論者たちは日本人の外国に対する知識の乏しさと、「島国」・「単一民族」といった「単一性」とを強く関連づけて論じているが、上で引用した記述内容を見れば、「複合民族」・「複合文化」であるはずの他の国々においても、外国（この場合、日本）に対する無知は生じているのであるから、この点を安易に「単一性」と結びつけて論じることの妥当性も問われることになる。

以上のように、「日本的」特性の独自性を強調する議論には、立論上その妥当性が疑われる箇所が存在する。論者たちのいう日本の独自性とは、さまざまな事例の検証を経て引き出されたものではなく、結論があらかじめ存在するものということができよう。したがって取り上げられる事例は、すべてその主張にとって都合の良いものばかりであり、その主張と相反するような、すなわち日本と他の国々の共通点を示すような事例は挙げられないし、その可能性も検討されていない。ところが、論者たち自身の気づかないところで、その矛盾があらわになっているのである。

このような点から、上記の議論の「学問的主張」としての価値には大いに疑問符が付けられる。しかし、問題はこれらの議論がそうした批判をあまり受けることなく、後発の議論へと引き継がれている点である。次節でこの点について述べることにする。

3. 日本人特殊論の「再生産」

この節では、独自性強調の言説が後発の議論に与えている影響について考察する。異文化適応についての議論がさかんに行なわれるようになるのは、先にも述べたとおり1980年代以降である。精神医学やその他の分野で異文化接触やカルチャー・ショックに関する特集が生まれ⁸⁾、単行本の形でもそれらのテーマを扱った書物が出版されるようになった。また、一般的な「適応」や「精神病理」の問題を扱った文献の中にも一章を構成する論文として、異文化接触状況での問題を扱った論文が組み入れられるようになった。

そうした論文群の中に、本稿で扱ってきたような、日本人特殊論の影響を受けた論文を見出すことができる。いわば言説の「再生産」がそこで行われているということができるのである。

日本人特殊論の再生産については、社会学者の吉野耕作が、日本人論で導き出された「理論」が、異文化マニュアルという形で商品化・大衆化されることを明らかにした（吉野，1997）。また、異文化間教育学者の馬淵仁も、実際に海外で生活している日本人や、異文化に関心をもつ日本人が、日本人論で論じられるような特性を日本人独自の特性として認識していることを明らかにした（馬淵，2002）。このように、日本人特殊論の再生産状況は、先行研究によっても明らかにされているが、この二つの研究はいずれも、学者・研究者の導き出した「理論」が、より大衆の現実に即した形に書き直され、伝達されていく、いわゆる「大衆化」という方向での再生産に着目したものであった。それに対し、本稿では、前述のとおり、日本人を特殊と見なす見解が、学問的性格をもつ議論においても再生産されている点に注目する⁹⁾。

3-1. 先行の議論の積極的援用とその妥当性

日本人特殊論からの影響を示す、そのもっともわかりやすい例は、参照の事実が文章中で直接言及されているものである。次に挙げる例は、『異文化コミュニケーションの理論』（2001年）の、「異文化適応理論」と題する項目における記述である。

「中根（1972）によれば、諸外国の人々と比較して、日本人が異質文化について理解し効果的に対応できるまでにはより長くかかる（約5年）。稲村（1980）は、海外で生活する日本人に不適応が多い理由として、1人になったときの耐性の弱さを指摘している。」（久米・遠山，2001: 123）

ここでは中根と稲村の著作を参照したことが明記されている。問題はこれらが「異文化適応理論」の諸説の一つとして扱われている点である。中根や稲村の議論における実証性の問題は、すでに前節において指摘したとおりである。ここでも、これらの知見がどれほどの根拠のもとに導き出されているかを疑ってみる必要がある。そこで、やはり実際の参照元の箇所当たって、どのような議論が展開されているかを確認してみることしよう。まずは中根から。彼女は次のように述べている。

「日本人が現地の人々と真剣にとりくんだ場合、その理解度が相当な水準に達し、仕事がスムーズにできるまでには、現地経験通算五年はかかるものと思われる。私は、たまたま昨年、東南アジア、インドで多くの海外駐在の方々にお会いしたが、その中で群をぬいて優秀な方だと思ったのは、五年以上の外地経験をもたれているきわめて少数の方々であり、その方々の意見は、二〜三年滞在の方々のそれと、はっきり異なる性質をもっていた。（中略）こうしてみると、私たちを制約している日本文化をのりこえて、異質の文化に対応で

きるようになるには、だいたい五年という年数が必要と思われる。

アメリカのビジネスマンの場合、日本でちゃんと仕事ができるようになるのには少なくとも三年かかるという。」（中根，1972: 173）

というのが、該当する箇所であるが、これをもって先の文章のように「（日本人の場合は）諸外国の人々と比較してより長くかかる」と結論づけるには、あまりに拙速な印象を受ける。「五年」とは、中根の印象から割り出された数字にすぎないし、アメリカ人についてはただの伝聞にすぎない。日本人は2・3年滞在している人よりも5年滞在している人の方がしっかりしている、アメリカ人は日本でちゃんと仕事ができるようになるには3年かかるらしい、と、これだけで日本人の方が適応により長くかかるというにはあまりにも根拠が乏しいといわざるをえない。

次に稲村のケース。彼は、日本人の「自己完結性の乏しさ」について述べている箇所で、「1人になったときの耐性の弱さ」に触れている。それは次のように論じられている。

「・・・日本人は、一般にこれら二つのもの（引用者注：自己完結性と対人疎通性）が現状では乏しいものと思われる。そのうちことに自己完結性が乏しく、相互依存的であるばかりか、心理的にも未熟な点がある。（中略）このために、日本人同志が集団になっている時には一般にとても適応力が強いが、一人だけ放り出されるとまことに弱い。借りてきた猫のようにおとなしくなり、無口になってしまうほか、孤独と疎外感に耐えられなくなってしまう。この自己完結性に関しては、白人などに比べると全般に日本人は格段に弱いとみなさざるを得ない。」（稲村，1980a: 225）

という箇所が該当するが、問題は稲村の記述がどこまで実証に耐えうるかという点である。ここでは「白人」との比較が言及されているが、文章中には「比較なき特徴づけ」で述べたとおり、やはり具体的な比較の証拠は示されていない。そもそも稲村が「白人」に対して貧困なイメージで語っていることは、他の箇所での「白人などと違って、邦人は一般に生真面目であり、スマートな異性交遊に慣れていない」（同上：48）という記述からも明らかである。しかも稲村は同様の記述を他の文献でも繰り返している（稲村，1980b: 51; 1980c: 1007; 1980d: 157）。このような見解から割り出される「日本的」特性がはたして妥当なものといえるのか、この点はやはり大いに疑わしいといわざるをえない。

ところが、上の文献と同様に稲村の自己完結性・対人疎通性についての見解をあたかも「学問的真実」であるかのように引く例は、『臨床精神医学』誌上の論文（阿部・宮本，1987）や、『異文化コミュニケーション』と題する学習者向けの書物の中の論文（久米，1996）においても見

ることができる。

日本人特殊論からの影響を示す別のパターンとして、ある事象について、一般的理論で説明可能なところを、「日本的」な特性と位置づけて説明する事例が挙げられる。その例としてここでは日本人女性の帰国適応問題に関する伊佐雅子（2000）の研究を取り上げよう。伊佐はここで、帰国後の再適応の問題に直面する日本人女性の事例を挙げて次のように説明している。

「日本は同質性の高い国であるので、内と外の間には明確な区別がみられる。有名な文化人類学者である中根（1967b）（引用者注：『タテ社会の人間関係』）によれば、日本は縦社会である。グループのメンバーだと見なされれば、グループ規範にそって行動することが期待される。また、グループ内の統一を図るため、敬意を払うことが求められている。そのため、人々の間には強い感情的な絆がみられ、それが内と外の間の特徴となっている。（中略）つまり、グループがすでにできている所に、新参者が入り、新しいネットワークを築いてゆくことは至難の業なのである。」（伊佐，2000: 200-201）

というように、中根の「タテ社会」論を用いて説明している。中根はこの「理論」を日本社会の特性を、そしてさらにはその独自性を説明するものとして用いており、伊佐もそれを支持しているものと思われる。しかし、ここで述べられているような集団内での規範への同調や、成員同士の連帯意識というものは、集団に関する研究においては基本ともいえる概念であって、日本人の集団に限った話ではない（たとえばマーソン，1961〔Merton, 1949〕：八・九章）。すなわち一般的な理論で説明が可能なのである。

そもそも中根の用いる「ウチ・ソト」概念も、彼女はあたかもそれを日本特有の概念であるかのように扱っているが、それが内集団・外集団の集団間関係で一般的に観察される事象とどのように違っているのかについては、十分検討されていない。たとえば中根は日本人の人間関係について、『適応の条件』の中で、自己に近い順に第一・第二・第三カテゴリーというものがある、それが同心円状に広がっているような図を提示しているが（中根，1972: 127）、それは、オルポートが内集団の構成について提示した図と似通っている（オルポート，1961〔Allport, 1958〕：39）。また、中根は「日本人の仕事ならびに社会生活は、基本的にはすべて第一、第二カテゴリーの中で生まれ、第三カテゴリーの人とは、その時々ビジネスでつながっているだけである」（中根，1972: 115）と述べているが、近い者との関係が重要になるのは、どの国の社会においてもそう変わらないだろう。中根はこれを日本的な人間関係と位置づけて「自己（集団）中心的、主観的な認識方法」（同上：123）と論じているが、他の社会でも同様の関係が存在することが明らかになった場合、中根は同じような評価を下すのだろうか。中根の文章から垣間見える日本人の行動・振る舞いに対する嫌悪感から察するに、「自己中心的・

主観的」という評価も、「日本的」特性と位置づけたうえで下されている評価であるように思われる。

こうした問題は、そもそも、一つの社会には一通りの人間関係しか存在しないと考えることから生じているのであって、この点については『タテ社会の人間関係』が出されたのち、他の研究者によっても指摘されている（たとえば米山、1976；南、1980。日本人論の批判的研究の立場からは杉本・マオア、1982）。

以上のように、ここでは先行の文献が積極的に参照され、援用されているケースを取り上げ、それらの文献を根拠として用いることの妥当性について検討してみた。結論としては、前半の例でも後半の例でも、自説の根拠として用いることができるほどには、先行の文献において論証がきちんとなされているわけではないということができよう。しかし、そうした議論が学問的な性格の強い文献においても支持され、「再生産」されていることを見ることのできる。

3-2. 立論および論調の継承

次に、文章中に中根や稲村らの名前は出てこないものの、彼らの提示した「日本的」特性やそれに似た特性が、日本人特殊論のニュアンスをもって用いられている例を取り上げたい。その際に注目すべきが、「島国」や「単一民族」といった条件が、日本の独自性を主張する根拠として用いられている点である。たとえば次の例は、その論理展開も含めて日本人特殊論の影響がはっきりと表れている。

「日本は島国であるために自然の国境がある。その点、世界的視野に立てば、特殊な国であると言えるだろう。つまり、日本人は国境というものを固定的にとらえ、不動のものともみなし、閉鎖的な思考に支配されてきた。また、国境の観念が非常に強い日本人は、異民族、異文化とのコミュニケーションがはなはだ苦手であると言われる。」（平山、1992: 211）

まず「島国」であること自体が特殊であるとされ、その条件に付随する形で「日本人は国境の観念が強い」、 「日本人は閉鎖的である」、 「日本人は異文化コミュニケーションが苦手である」という命題が示されている。しかし、これもいわゆる言いつばなしの状態であって、この命題の真偽についてはまったく問われていない。たとえば、この見解に対して「大陸の諸国は、隣国と陸続きで接しているために、絶えざる緊張関係から国境の観念が強い」という逆の命題を立てることも可能であろう。そしてその命題に沿ったエピソードを並べることもできるだろう。その場合、「島国」という条件は何らその命題の根拠にはなりえないのである。同様の問いを他の命題にも当てはめてみれば、これらの命題がまったく自明のものではないことが明らかと

なる。しかし、このような論理展開で命題を提示するパターンは、他の論者にも見られる。それを大まかに区別してみると、「日本人は自文化中心主義的である」(星野他, 1983; 阿部・宮本, 1987; 川端, 1995), 「自文化を客観視する経験に乏しい」(近藤(喬一), 1983), 「閉鎖的である」(柴田, 2001), 「異なる経験をもつ人への寛容度が低い」(伊佐, 2000)などと分けることができる。だが、そのいずれにおいても、他の集団においても同様の命題が当てはまる可能性がはじめから切り捨てられているという特徴を指摘することができる。

そして上記の命題を見れば明らかなように、やはり異文化適応という文脈においては、日本人には非常に否定的な特性が付与されているといえるだろう。日本人は日本人自身によってあらかじめ、異文化適応について他国の人々よりも遅れをとった存在として見なされている。いかえれば、日本人の目には他国の人々が異文化適応を日本人に比べてずっと上手にこなしている存在として映っているのである。したがって、彼らの目に付くのは、先行の議論がそうであったように、自分以外の日本人の行動や振る舞いである。自分以外の日本人の一挙手一投足に、不適応の原因を見出さずにはいられない。次の例には、それがよく表れている。

(引用者注：ボストンに日本人が多く住むアパートがあるということに触れたあと)「こうしたアパートに住む日本人達は、当然のようにアパート内や近所では日本語で会話する。奥様方や子供達同士も日本語で会話する。同じエレベーターに外国人が乗りあわせていようと、気を遣うこともなく平気で日本語で会話をする。」(吉田, 2001: 122)

この論者はそれを苦々しく思っているわけだが、こうした行為はとくに日本人に限られたものではないはずである。しかし彼はこうした事例を挙げながら結局「海外における日本人にとっての『異文化ストレス』の原因の多くは、我々が持つ価値観をそのまま海外で通そうとする結果起きる摩擦によるものであり、他民族の文化を理解しようとしめない姿勢にある」(同上: 132)という結論に達している。

以上のように、日本人特殊論が後発の議論においても、先行の議論と非常に似通った形で展開されていることがわかる。つまりそこでは、先行の議論がかなり信頼性の高い議論として受け入れられている点を指摘することができる。そして同時に、日本を特殊視する視点や「日本的」特性を体現する日本人の行動・振る舞いに対する否定的感情も引き継がれ、「再生産」されている点も指摘することができる。

おわりに

本稿では、異文化適応に関する議論のうち、不適応の要因を日本人の行動特性に見出す議論

を取り上げ、その議論に見られる日本独自性の信念を問題にした。そして、その信念が、議論の実証性の乏しさにも関わらず、後発の議論にも引き継がれている点を指摘した。これによって、日本人の特殊性を強調する言説が、学問的な議論の場においてもなお受け入れられ、「再生産」されている状況を明らかにしたつもりである。

また、もう一つの注目点として、異文化適応の文脈で語られる日本人特殊論に対する論者のスタンスがあった。議論を見て明らかのように、論者は日本人の行動特性に対して、否定的・批判的であった。同時に、それを日本特有のものとして位置づけていた。したがって、この論理的帰結は、日本人の振る舞いや行動に対する否定でしかありえない。日本人は、日本人自身によってあらかじめ不利な役割を担わされ、異文化への「適応」という文脈でその修正を求められるのである。先述の吉野耕作は、日本人論の読み手（消費者）の多くが、日本人論を「日本自省論」の延長としてとらえていたことを明らかにしたが（吉野，1997）、それは読み手が、こうした議論に触れてきた可能性を示している。読者は、「日本的」特性を異文化にはそぐわないものとしてとらえ、反省するよう動機づけられるのである。

しかし、こうした議論の最大の欠点は、適応すべき異文化の実像にはまったく迫っていないことである。日本と対置されるのは漠然とした「外国」であって、それは「複合民族」・「複合文化」とは名ばかりの、きわめて単一的なイメージで語られる存在でしかありえない。それは結局、否定すべき「日本的」特性への対概念が並べられた、日本人の理想像の投影に過ぎないのである。こうして描き出される異文化が、実像とかけ離れていることは言うまでもない。異文化適応に関する議論の根本的な条件が欠如しているのである。

これは、この時期の、日本人が日本人自身、そして異文化を語る際の一つの特徴を示している。今後はこの点を、論者の当時の日本社会における立場や位置取りなども考慮に入れて考察していく必要がある。

注

- 1) 「文化摩擦」は、国際関係論を専門とする衛藤瀋吉によって提唱された言葉で、異質の文化が接触したときに起こる文化同士の対立や、人間の心に起こる心理的な緊張や葛藤を表わしている（衛藤，1980）。ただし、衛藤自身は、この言葉を、「同時にそこから新しい価値も生まれ、新しい文化も生まれてくる・・・決してマイナスの価値のみではない、きわめて中立的な概念である」（同上：12）と述べている。
- 2) 中根（1972）は「カルチュア・ショック」と表記している。
- 3) 稲村の論文の特徴として、参考文献がほぼ自著で占められ、他の研究者の文献の参照が非常に少ないという点が挙げられる。
- 4) 一方、中根（1967; 1972）や稲村（1980a）には、参考文献が記されていない。
- 5) 他の例その一、（引用者注：自己完結性の欠如について）「これは邦人にきわめて著しく、他の民族にはほとんどみられないほどその程度が著しい。」（稲村，1979: 327. 下線部は引用者。以下同じ）。

その二、「日系企業では現地責任者の権限がきわめて小さいことである。(中略)これが白人企業との大きな違いであり、またほとんどの国の習慣とも異なる。」(同, 1980a: 66)。

その三、(引用者注: 各人の分業が徹底していることについて)「なおこれは、途上国だけのことではない。欧米など先進国もみなそうである。そもそもが、彼らが植民地で教え、それが今日世界中の習慣となったのであろう。いずれにせよ、その点に関しても、日本はほとんど例外に属する国といえよう。」(同上: 75)。

- 6) 例その一、「外国に滞在しているインド人・中国人・ヨーロッパ人たちが現地において、ゆうゆうとして仕事をし、落ち着いた生活をしているのは、実にこのネットワークの存在にあるのである。」(中根, 1967: 61)。

その二、「・・・日本人はインテリを含めて、西欧やインドの人々がするような、日常生活において、論理のゲームを無限に楽しむという習慣をもっていない。」(同上: 181-182)。

- 7) これは「外集団均質性効果 (out-group homogeneity effects)」と呼ばれている。
- 8) 精神医学分野では、この分野の学術雑誌に掲載される個別の論文をはじめとして、1984年には『社会精神医学』(7巻1号)誌上にて「海外移住者の精神衛生」、1987年には『臨床精神医学』(16巻10号)誌上にて「文化摩擦と精神医学」、『こころの科学』(77号, 1998年)誌上で「異文化とメンタルヘルス」という特集が組まれている。また、それより少し広い分野を扱う雑誌においては、『現代のエスプリ』誌上において「カルチャー・ショック」(161号, 1980年)、「異文化接触と日本人」(322号, 1994年)、「異文化ストレスとの遭遇」(412号, 2001年)がそれぞれテーマとして生まれ、『青年心理』(84号, 1990年)誌上で「異文化の体験」という特集が組まれている。
- 9) 中根『適応の条件』は講談社現代新書から、稲村『日本人の海外不適応』はNHKブックス(日本放送出版協会)からと、一般読者にも手に入りやすい形で出版されている。したがって、そうした文献では、学者の手によるものとはいえ、「日本的」特性の独自性をやや誇張して書いているということは考えられるのである。しかし、そうした主張が、学問的性格をもつ議論においても引き継がれている点を指摘することができる。本稿で注目するのは、そうした議論での再生産状況である。

<参考文献>

- 青木保(1990)『『日本文化論』の変容－戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論社。のちに中公文庫, 1999年。
- 阿部裕・宮本忠雄(1987)「精神医学的見地からみた文化摩擦」『臨床精神医学』16(10), 1375－1382頁。
- 伊佐雅子(2000)『女性の帰国適応問題の研究－異文化受容と帰国適応問題の実証的研究』多賀出版。
- 稲永和豊・土屋直裕・長谷川和夫・近藤喬一(1965)「米国における日本留学生の生活適応」『精神医学』7(5), 413－418頁。
- 稲村博(1979)「人格力動・精神病理の異文化間研究－日本人が「固まる」ことの考察」『心理学評論』22(3), 319－331頁。
- (1980a)『日本人の海外不適応』日本放送出版協会。
- (1980b)「文化摩擦と地理病理学」山口誠哉編『疾病の地理病理学』朝倉書店, 43－55頁。
- (1980c)「海外在留邦人の不適応現象－文化摩擦の精神医学的研究」『精神医学』22(9), 983－1010頁。
- (1980d)「先進国と発展途上国における日本人の不適応現象の比較」星野命編『現代のエスプリ 161－カルチャー・ショック』至文堂, 150－165頁。

- 衛藤藩吉（1980）「序論・文化摩擦とは？」同編『日本をめぐる文化摩擦』弘文堂。
- 川端美樹（1995）「自文化中心主義と偏見」渡辺文夫編『異文化接触の心理学』川島書店，183 - 194 頁。
- 久米昭元（1996）「カルチュア・ショックと適応過程」石井敏他『異文化コミュニケーション』（改訂版）有斐閣，207 - 227 頁。
- 久米昭元・遠山淳（2001）「異文化接触中心の理論」石井敏・久米昭元・遠山淳編『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣，111 - 139 頁。
- 近藤喬一（1983）「対人恐怖-恥と世間体社会の病理」荻野恒一・星野命編『カルチュア・ショックと日本人-異文化対応の時代を生きる』有斐閣，48 - 64 頁。
- 近藤裕（1981）『カルチュア・ショックの心理-異文化とつきあうために』創元社。
- 柴田仁太郎（2001）「在日外国人の異文化ストレス-東京都立病院内科外来よりみた視点から」福西勇夫編『現代のエスプリ 412 - 異文化ストレスとの遭遇』至文堂，87 - 97 頁。
- 島崎敏樹・高橋良（1967a）「海外留学生の精神医学的問題（その1）-留学中の精神障害例ことに精神分裂病とうつ病について」『精神医学』9（8），564 - 571 頁。
- （1967b）「海外留学生の精神医学的問題（その2）- AFS 交換高校生の滞米中の自覚症状」『精神医学』9（9），669 - 672 頁。
- 杉本良夫・マオア，ロス（1979a）「くたばれジャパノロジー-「日本人同質論」の方法論的問題点」『現代の眼』20（6），134 - 145 頁。
- （1979b）「中根千枝説への方法論的疑問-続・くたばれジャパノロジー」『現代の眼』20（7），124 - 135 頁。
- （1979c）「土居健郎説への方法論的疑問-続々・くたばれジャパノロジー」『現代の眼』20（9），200 - 213 頁。
- （1982）『日本人は「日本的」か-特殊論を超え多元的分析へ』東洋経済新報社。のちに加筆・改題『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫，1995 年。
- 高橋哲郎（1983）「文化葛藤と病い」飯田真他編『治療と文化』岩波書店，209 - 236 頁。
- 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係-単一社会の理論』講談社現代新書。
- （1972）『適応の条件-日本的連続の思考』講談社現代新書。
- 平山正実（1992）「文化摩擦と精神障害」土居健郎他編『文化・社会の病理』（異常心理学講座 10）みすず書房，209 - 257 頁。
- 福西勇夫編（2001）『現代のエスプリ 412 - 異文化ストレスとの遭遇』至文堂。
- 星野命（1982）「個人レベルの文化摩擦について」大林太良編『文化摩擦の一般理論』巖南堂書店，273 - 302 頁。
- 星野命他（1983）「座談会・わたしのカルチャーショック」（NHK 海外放送 1981 年 11 月 3 日文化の日特別番組より）「文化と人間」の会編『異文化との出会い』川島書店，7 - 23 頁。
- 星野命編（1980）『現代のエスプリ 161 - カルチャー・ショック』至文堂。
- 馬淵仁（2002）『「異文化理解」のディスコース-文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会。
- 南博（1980）『日本人論の系譜』講談社現代新書。
- （1994）『日本人論-明治から今日まで』岩波書店。
- 箕浦康子（1987）「異文化接触研究の諸相」『文化と人間』の会編『異文化とのかかわり』川島書店，7 - 36 頁。
- 横田雅弘・堀江学編（1994）『現代のエスプリ 322 - 異文化接触と日本人』至文堂。

- 吉田聡 (2001) 「アジアに取り残される日本」福西勇夫編『現代のエスプリ 412 - 異文化ストレスとの遭遇』至文堂, 119 - 132 頁。
- 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学 - 現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会。
- 米山俊直 (1976) 『日本人の仲間意識』講談社現代新書。
- 『こころの科学』 77 (1998)。
- 『社会精神医学』 7 (1) (1984)。
- 『青年心理』 84 (1990)。
- 『臨床精神医学』 16 (10) (1987)。
- Allport, G. W. (1958) *The Nature of Prejudice*, New York: Doubleday and Company, Inc. = 原谷達夫・野村昭訳 (1961) 『偏見の心理』培風館。
- Merton, R. K. (1949) *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Glencoe: The Free Press. = 森東吾他訳 (1961) 『社会理論と社会構造』みすず書房。
- Oberg, K. (1960) Cultural shock: adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- Ostrom, T. M. and Sedikides, C. (1992) Out-group homogeneity effects in natural and minimal group. *Psychological Bulletin*, 112, 536-552.

(木村 有伸, 立命館大学国際関係研究科研究生)

Strong belief in Japanese uniqueness in papers about cultural adjustment

Although the validity of academic discourse that emphasizes Japanese uniqueness has been challenged, we can see in academic arguments that this belief remains strong. In this paper, I examine some papers and articles about cultural adjustment and demonstrate the continuity of such beliefs. In Japan, the discussion of cultural adjustment has grown popular since the beginning of the 1980s. We can see the tendencies towards assertion of Japanese uniqueness in these early arguments. The authors of these papers insist that culture shock or maladjustment of Japanese to different cultures is a characteristic of the Japanese themselves, especially their “ethnocentrism” and “collectivism.” The authors consider these characteristics as unique to Japanese, and emphasize their difference from the people of other countries. They justify their opinion by stressing that Japan is an island country as well as a homogeneous country. From this viewpoint, the authors criticize the behaviors of Japanese in foreign countries, especially attacking those Japanese who behave as they do in Japan. That is, the authors believe that the Japanese ways of behavior and thinking are not common in any other country.

However, the evidence to support this opinion is in fact very scarce. First, the authors conclude that these characteristics are unique to Japan without making comparisons with other countries. The examples they offer refer only to the Japanese. They hardly suggest the possibility that such characteristics can be seen in other countries. Second, if the same cases are found in other countries, the authors insist on Japanese uniqueness with the change of interpretation. For example, regarding the tendencies of Chinese and Japanese toward intragroup conformity, an author interprets the Chinese case as “broad-minded and generous,” but not the Japanese case. Moreover, reasons or evidence are not presented. Third, the authors sometimes offer incoherent assertions about Japanese uniqueness. These flaws reduce the validity of their arguments as academic propositions.

In spite of these defects, such opinions influence the following arguments about cultural adjustment. We can see the impact of these views in the papers, discussions, and essays of psychologists, psychiatrists, anthropologists, etc. Some arguments quote directly from earlier arguments whose evidence is scarce. In addition, some arguments insist on Japanese uniqueness, similar to preceding arguments. However, they also have a methodological problem, that is, a lack of comparison.

In this paper, I demonstrate the continuity of the belief in Japanese uniqueness. It is remarkable that opinions with scarce supporting evidence are still quoted as academic propositions.

(KIMURA, Arinobu, Doctoral Research Student, Graduate School of International Relations,
Ritsumeikan University)